

2017 年度第 1 回支部集会【九州・沖縄支部】

「やる気を引き出す」学びの交流会 in 大分

2017 年 6 月 10 日(土)・11 日(日)

大分大学 旦野原キャンパス

主催:公益社団法人日本語教育学会 協賛:国立大学法人大分大学

協力:九州日本語教育連絡協議会

会場:〒870-1192 大分市大字旦野原 700 番地 大分大学 旦野原キャンパス 教養教育棟

交通アクセス:<http://www.oita-u.ac.jp/category/access.html>

参加費:1,500 円(当日会場にて現金でお支払いください)※事前登録は[学会ウェブサイト](#)「マイページ」から

◆支部集会日程◆

第 1 日目 10 日(土)		第 2 日目 11 日(日)	
12:30	受付開始	9:30	受付開始
13:00	開会	10:00-12:00	ワークショップ
13:10-14:40	講演	12:00-13:30	よろず相談
14:50-16:20	パネルディスカッション	12:50-14:20	ポスター発表・交流ひろば
16:30-18:00	よろず相談	14:30-16:00	ワークショップ・ラウンドテーブル
18:15	懇親会	16:10	閉会

第 1 日目 10 日(土)

講演

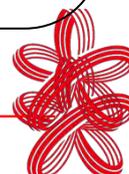
【13:10-14:40/教養教育棟 1 階第一大講義室】

「もう一度考えよう。やる気を引き出す授業って？」

ーインストラクショナルデザインと授業改善ー

講師:鈴木克明(熊本大学)

インストラクショナルデザイン(授業設計学)は教育の効果・効率・魅力を高めるための理論やモデルを研究してきた分野で、近年、日本語教師の間でもその有用性に関心が寄せられています。他方で、多様な学習動機から日本語を学んでいる学習者のやる気を引き出し、それを維持していくことは大変で、参考になることがあればぜひ知りたい、と思っている方も多いことでしょう。この講演では、「やる気を引き出す授業ってどんな授業だろう?」という素朴な問いに授業設計学では「出口と入口のギャップを意識してそれを埋めようとする気持ちになる授業」と同時に、「終わったときにもっとやりたいという気持ちが残っている授業」と考えることを紹介します。そして、やる気を引き出すための理論として世界中で最も広く用いられている ARCS モデルを使って、この問題を解決する方法を考えてみましょう。



パネルディスカッション 【14:50-16:20／教養教育棟 1 階第一大講義室】

「日本語教師として考えておきたい地震のこと

－熊本地震の教訓を忘れないために－

進行: 本田明子(立命館アジア太平洋大学)

パネリスト: 吉里さち子(熊本大学), 神智子(一般社団法人別府インターナショナルプラザ),
板橋民子(立命館アジア太平洋大学), Jayathilkae Birendre(立命館アジア太平洋大学卒業生),
Bhagya Gunawardena(立命館アジア太平洋大学学生)

2016年4月に発生した熊本地震の際には、隣県の大分県別府市でも震度6弱の揺れを記録しました。大分県には3500人ほどの留学生がおり、生まれてはじめて地震を体験した学生も多くいました。このパネルディスカッションでは、大分県の中でも強い揺れを観測した別府市にある立命館アジア太平洋大学(APU)での調査をもとに、地震発生後に学生がどのように行動したのかを知り、留学生の教育に携わる日本語教員には何ができるのかを考えます。調査を実施した日本語教員たちが感じたのは、日ごろの地域とのつながりがいざというときの防災対策として有効だということでした。パネリストには、大学の日本語教員、別府市多言語支援センターの本部スタッフ、留学生といった多様なメンバーを迎え、APUの板橋民子氏には調査結果とその後の活動の報告、熊本大学の吉里さち子氏には地震体験と留学生の動向、別府インターナショナルプラザの神智子氏には地域の外国人支援と日本語教員の連携の可能性、スリランカからの留学生には地震体験を話していただきます。そして、教員・地域・学生の3者のつながりを深めるために、わたしたちに何ができるのかを考えたいと思います。

よろず相談 【16:30-18:00／教養教育棟 2 階 25号, 26号, 27号, 28号】

「学会発表応募から日々の授業まで。何でもかんでも問題解決！

あの!?先生が答えてくれる, よろず相談」

よろず相談講師

- ・磯村一弘(国際交流基金日本語国際センター)「課題遂行型の授業の実践」
- ・山田智久(北海道大学)「ICT 関連, 協同学習」
- ・横溝紳一郎(西南女学院大学)「教師ができること・すべきこと・やってはいけないこと」
- ・小山悟(九州大学)「学会発表体験報告」
- ・チャレンジ支援委員会「発表応募コンシェルジュ」, 他

懇親会

【18:15-／生協食堂 B-Forêt(ビーフォーレ) 予定】



第2日目 11日(日)

ワークショップ

【10:00-12:00/教養教育棟 2階 21号】

「ARCSモデルでやる気が高まる授業をデザインしてみよう」

講師: 鈴木克明(熊本大学)

ARCSモデルは、日本語教育のみならず様々な領域の授業改善のために世界中で最も広く用いられている、やる気を引き出すための理論的枠組みです。やる気が出ない原因を Attention(注意: おもしろそうだ), Relevance(関連性: やりがいがありそうだ), Confidence(自信: やればできそうだ), Satisfaction(満足感: やってよかった)の4つに分類し、それぞれ対応策を考えていくプロセスを支援する授業デザイン理論です。このワークショップでは、参加者ご自身が担当している(してきた)授業を一つ取り上げ、ARCSモデルを使って現状を分析して次にやるときに何をどう改善したらよいかを考えていきます。互いにアイデアを出し合って、より良い授業デザインを導き出していくプロセスを体験してみましよう。

よろず相談

【12:00-13:30/教養教育棟 2階 25号, 26号, 27号】

「学会発表応募から日々の授業まで。何でもかんでも問題解決！」

あの!?先生が答えてくれる、よろず相談」

よろず相談講師

- ・磯村一弘(国際交流基金日本語国際センター)「音声指導の実践」
- ・山田智久(北海道大学)「ICT 関連, 協同学習」
- ・横溝紳一郎(西南女学院大学)「教師ができること・すべきこと・やってはいけないこと」
- ・小山悟(九州大学)「進学相談」
- ・小畑美奈恵(早稲田大学大学院生)「学会発表体験報告」
- ・チャレンジ支援委員会「発表応募支援セミナー」, 他

研究発表(ポスター発表)

【12:50-14:20/教養教育棟 2階 24号】

※本発表は査読審査を経た学会発表です。発表要旨は本プログラム最終頁, 詳細は予稿集原稿をご覧ください。

- ① コーパスによる日本語能力試験2級の文法項目の再検討
鋤野亜弓(福岡女子大学大学院生)
- ② 意見文における因果関係の表し方—「理由先行型」か「結果先行型」か—
美玲(福岡女子大学大学院生)
- ③ スマートフォンを活用した活動型学習の可能性—街歩きクイズラリーを通じた交流の一考察—
高尾まり子・寺嶋弘道・戸坂弥寿美・井上佳子(立命館アジア太平洋大学)



交流ひろば

【12:50-14:20／教養教育棟 2階 23号】

※「交流ひろば」は、日本語教育とその関連領域の話題についての参加者相互の情報共有および同じ興味や問題意識を持つ者同士のネットワーク作りを目的としています。審査を経た学会発表ではありません。

「交流ひろば」への出典は、学会員・非会員に限らずどなたでも可能です。

◆「外国人が地域社会に順応するための方言教材の紹介－聞き取り教材の作成に向けて－」

馬場良二(熊本県立大学), 和田礼子(鹿児島大学), 大庭理恵子(熊本県立大学),
田川恭識(神奈川大学), 吉里さち子(熊本大学)

本研究グループは、地方在住の日本語学習者がその地域社会により順応できるようにするため、地域語(方言)教材の開発とその方法論の構築を目指しています。これまでに作成した方言教材(初級・中上級)を見ていただきながら、意見交換をしたいと思います。

<http://www.pu-kumamoto.ac.jp/~iimulab/dialect/>

◆「留学生とチューターによるコミュニティを目指して:GYCの挑戦」

小林浩明(北九州市立大学)

私たちは留学生とチューター学生が共に学生生活を過ごすためのコミュニティ作りを行っている団体です。いろいろな現場で同じような問題意識を持っている方と一緒に考えていきたいと考えています。興味のある方はぜひお越しください。

◆「学士課程における初年次教育の実践－口頭発表からレポート作成まで－」

中島祥子(鹿児島大学)

初年次教育科目(留学生は2科目中1科目必修)において、口頭発表やレポート作成を目的とした授業を担当しています。留学生必修の日本語科目との関連も含め、ぜひ情報共有や意見交換を行いたいと考えています。

ワークショップ

【14:30-16:00／教養教育棟 2階 21号】

「日本語教育 学のデザインーみんなで考える九州の日本語教育の今とこれからー」

講師:神吉宇一(武蔵野大学)

「日本語教育学とは何か」。この問いを出発点として、2015年に『日本語教育 学のデザイン』を出版しました。本ワークショップは、この問題意識の延長線上にあるものです。日本語教育学の議論は、90年代の日本語教育「内部」の精緻化から、2000年代には「外部」との融合・連携という段階へと変化してきています。現在、日本語教育を取り巻く環境としては、高度にIT技術が発達しいわゆる「教室」以外でも簡単に学べるようになったこと。グローバル化の進展と日本の少子高齢化の進行により、外国人が増加してきていること。さらに、AIの発達により「ほんやくコンニャク」実現化が見えてきていることなどが挙げられます。このような状況下、日本語教育学とは何か、その研



究としての守備範囲，そして実践としての拡がりをどのように考えていけばいいか，皆さんと議論したいと考えています。当日は，九州の状況・文脈を踏まえ，「私が考える日本語教育」をグループで議論し，最終的にイメージ化する作品として仕上げます。

ラウンドテーブル

【14:30-16:00／教養教育棟 2階 22号】

「みんなでく多読」を考えようーやる気を引き出す日本語インプットを目指すー

発題者：門倉正美（横浜国立大学名誉教授），佐々木あや（株式会社アルク），

佐々木良造（秋田大学），吉川達（佐賀大学）

読解というと、「学習者は指定された文章を読み，わからない単語を調べ，文章に関する質問に答える。教師は授業で答え合わせをしながら解説をし，ときには発展的に文章の内容に関して意見を述べさせたり，作文を書かせたりする」ということが一般的ではないでしょうか。精読とも言えるこのような方法も大切ですが，学習者にも教師にも達成感が薄く，わかったようなわからないような，もやもやした感じが残ることもあります。このラウンドテーブルでは多読を取り上げ，読解と区別して，違ったアプローチから読むことについて考えます。多読には，いくつかのルールがあります。会場ではそれらを整理し，実際の日本語教育現場でどのように取り入れるのか，取り入れる際に問題となることは何か，多読のための材料にはどのようなものがあるのかなど，問題提起者と会場の参加者が一緒になって考えたいと思います。多読という言葉聞いたことはあるけれどよく知らない人，すでに実践している人，実践したけれど失敗した人，読解授業に行き詰まりを感じている人など，多くの方と意見交換ができることを期待しています。

◆連絡事項◆

- ・参加費（一律1,500円）は当日，受付にて現金にてお支払いください。日本語教育学会ウェブサイトの「マイページ」から支部集会参加の事前登録（6月7日締切）をしていただくと，開催前に予稿集をダウンロードしてご覧になれます。（事前登録をしなくても参加は可能です。）
- ・昼食は，10日（土）は大学内の生協食堂や売店が営業していますが，11日（日）は営業していません。大学周辺のお店も限られるので，11日（日）は昼食の持参をおすすめします。
- ・キャンパス内は全面禁煙です。

◆問合先（平日 9～18 時のみ）◆

- ・公益社団法人日本語教育学会 支部活動委員会
E-mail: shibu@nkg.or.jp TEL: 03-3262-4291
- ・当日の緊急連絡は，日本語教育学会携帯電話（nkgoffice@softbank.ne.jp または 090-1999-3315）までお願いします。電話に出られない時間帯もありますのでご了承ください。



[2017 年度第 1 回支部集会 (大分大学, 2017.6.11) 発表・ポスター①]

コーパスによる日本語能力試験 2 級の文法項目の再検討

鋤野亜弓

本発表では『日本語能力試験 出題基準 (改訂版)』(2002) の「2 級の文法的な〈機能語〉の類 (サンプル)」にある項目を場面ごとに使用頻度調査を行った。場面は学習者が実際に使用する必要がある「産出」と、聞いたり、読んだりしてわかる程度でもよい「理解」、更に話す・聞くの「音声言語」と書く・読むの「文字言語」に分け、「産出・音声」「産出・文字」「理解・音声」「理解・文字」と大きく 4 つに分類した。その上で学習者が遭遇する場面を想定し、コーパスを用いて調査を行った。

各コーパスの出現頻度上位 5% 以上を比較し、その結果、場面ごとによく用いられている項目、ほとんど使用されていない項目、全く使用されている項目が明らかとなった。実用的な運用の能力を高めるためには、使用場面を明らかにしつつ、どの項目が用いられるのか、またどの項目が用いられにくいのかを教師側も学ぶ必要があるため、有効な結果となったといえよう。

(福岡女子大学大学院生)

[2017 年度第 1 回支部集会 (大分大学, 2017.6.11) 発表・ポスター②]

意見文における因果関係の表し方

—「理由先行型」か「結果先行型」か—

美玲

本発表では、意見文における因果関係を表す接続表現の使用傾向について、日本語学習者と日本語母語話者を比較しながら、「因果関係を表す際に、理由と結論のどちらを先に述べるか」という観点に注目し、調査・分析を行った。その結果、以下の 2 点が明らかとなった。1) 「理由先行型」と「結果先行型」の使用について、日本語母語話者がおよそ 7 対 3 であるのに対し、日本語母語話者は 9 割以上が「理由先行型」だった。2) 日本語母語話者は文章中の機能によって「理由先行型」と「結果先行型」を使い分けている。使い分けのルールは以下の 2 点である。①主張提示のところでは「結果先行型」が高い頻度で用いられる。②事実提示と結論提示のところでは、主に「理由先行型」が用いられる。ただし、主張の根拠になる理由がいくつかある場合や、結論のところでは主張を繰り返す場合は、「結果先行型」を用いることもある。

(福岡女子大学大学院生)



〔2017 年度第 1 回支部集会（大分大学，2017.6.11）発表・ポスター③〕

スマートフォンアプリを活用した活動型学習の可能性

—街歩きクイズラリーを通じた交流の一考察—

高尾まり子・寺嶋弘道・戸坂弥寿美・井上佳子

本研究では、留学生と地域の母語話者が関わる活動として、スマートフォンのアプリ「まちクエスト」を用いた交流イベントの実施を試み、活動型学習としての可能性を検証した。参加者は留学生 6 名、母語話者 11 名で、質問紙及びフォローアップインタビューにより言語や交流、街歩きに関する感想を聞いた。調査の結果から留学生も母語話者も、このイベントを楽しんだこと、双方が積極的に協力したこと、イベント中に様々な話題で会話したこと、街について発見があったことがわかった。また、母語話者と比べると、留学生は言語学習や街に関する知識を深めるという点でメリットを感じ、母語話者との交流に対する自信や意欲が高まっていた。双方は様々な話題を通して互いのことを多く知り、イベント後も交流が継続している者もいた。本研究のような方法は、留学生と母語話者との関係構築に有効な活動型学習の一つになり得ると考察した。

（立命館アジア太平洋大学）

以上

